



Title	紀海音と勅撰和歌集：謡曲との関りから
Author(s)	富田, 康之
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 102, 49-65
Issue Date	2000-12-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33981
Type	bulletin (article)
File Information	102_PR49-65.pdf



[Instructions for use](#)

紀海音と勅撰和歌集

— 謡曲との関りから —

富 田 康 之

はじめに

紀海音と謡曲との関係については既に述べた。^(注1)海音が時代物浄瑠璃中に謡曲を多数利用した事を見たが、その場合、ある程度の表現の分量的対応を利用の根拠とした。但しそこでは、利用が和歌表現に限られる場合は謡曲の利用とは判断しなかった。当然のことながら、勅撰集等の和歌利用の表現に関して言えば、海音が勅撰集等から直接利用したのか、一旦謡曲に取り込まれた表現を再利用したのかが判別できないからである。しかしながら謡曲表現の利用が多数に上ることを見れば、海音の和歌利用が常に勅撰集等の歌集のみを直接的典拠としたとは考えにくい。一例を挙げてみたい。『日本古典文学体系』51『浄瑠璃集上』所収『八百屋お七』中之巻にある「叶はぬ事をくどくどよしな浮名濡れ衣の。重きが上の小夜衣なんの蓑笠いらぬとて。左や右に脱ぎ捨て。」の頭注には、「新古今集巻二十、釈教、

不邪姪戒、寂然法師『さらぬだに重きが上のさよ衣わがつまならぬつまな重ねそ』による」とある。しかし、『八百屋お七』（正徳五年秋以降享保初年（注2）の頃）に先立ち上演された『小野小町都年玉』（正徳三、四年頃の正月か）第三には、次に示す通り同様の表現が採られているのである。

ちゝの御りやうちやう。おもきが上のさよ衣重んことはほゐならず。

更には、『八百屋お七』の上演に遅れるが、『三輪丹前能』第四、『八幡太郎東初梅』第一にも、

○そのいましめもふかからん。おもきがうへのさよ衣。よこ槌殿が女がたきとねたみ給ふとなんとせう。
○恋風さはぐふるい声おもきがうへのさよ衣。よこ槌殿が女がたきとねたみ給ふとなんとせう。

と利用されている。海音の表現は何れも「おもきが上のさよ衣」の表現が一致している。もう一つ言えば、『小野小町都年玉』の表現には「おもきが上のさよ衣重んことは」と続き、一見すれば『新古今集』寂然法師の和歌の「つまなかさねそ」に対応するようと思われる。ところが、謡曲『通小町』には、「わが思ひ重きが上の小夜衣重ねて憂き目を三瀬川に」とあり、『小野小町都年玉』の「さよ衣重」という表現は『新古今集』よりも『通小町』の表現に近いと考えられるのである。更に言えば、『小野小町都年玉』では他の部分にも『通小町』の表現を利用した個所が確認される（注3）。よってここでも『小野小町都年玉』が『新古今集』よりもむしろ『通小町』を利用したと考えられよう。そうであれば、『八百屋お七』の表現も『通小町』の表現を利用した可能性が高いのではなからうか。少なくとも、注釈での典拠には『新古今集』と『通小町』の両所を指摘すべきかと思う。

謡曲をフィルターとして、より観客周知のものとなった和歌表現を利用するのも浄瑠璃作成の方法と思われる。よって、以上のような観点から、謡曲を通して勅撰和歌集の利用を試みる試みもあながち無駄ではないと考える。ここ

では、対象を海音の時代物浄瑠璃に絞って調査してみたい。尚、和歌を利用したと認定する基準は、原則として二句以上に対応する語句的関連が確認できるものとする。

利用一覽

【古今和歌集】

記載順序は、勅撰和歌集毎に纏め、●印、歌番号、和歌、作者の順とし、次に◎印、海音作品の表現、作品名・段数、(巻数・頁)、更に○印、謡曲作品の表現、作品名、(巻数・頁)を示す。(注)

●(古今集序)めに見えぬおに神をもあはれとおもはせ、をとこをむなのなかをもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるはうたなり

◎目に見へぬ鬼神も。やはらぐるは和歌のとく。

『小野小町都年玉』第二(二・二四)

◎又力をも入らずして天地までもうごかす。目に見ぬきじんをかんぜしめいもせの中もやはらげつ。たとへばたけき

『新百人一首』第五(三・一二二)

武士も心やはらぐ其ためし。

○然れば目に見えぬ鬼神をも和らげ、武士の心慰むる。夫婦の情知る事も今身の上に知られたり『蘆刈』(一・六〇)

○力をも入れずして。天地を動かし目に見ぬ鬼神の。猛き心を和らぐる。『繪馬』(五・三四四六)

●(古今集序)ありはらのなりひらはその心あまりてことばたらず、しほめる花のいらくなくてほひのこれるがごとし

◎心ほそしやはかなしと。互に御手を取かはし。しほめる花の色なくて。匂ひ残れる御かほばせ。

『大友皇子玉座靴』第三(六・三〇一)

○「われながらなつかしや。亡婦魄霊の姿は凋める花の色なうて匂ひ。残りて在原の寺の『井筒』(五・三四一二)

●(古今集序) おほとものくろぬしはそのさまいやし、いはばたきおへる山びとの花のかけにやすめるがごとし

◎それも尤じや。薪をおへる山人も花の影には休むといふ。
『本朝五翠殿』第三(四・三一)

◎貫之暫し打詠じ歌の程をたとふれば。薪をおへる山人の。花の木影を行帰りやすらふ風情とほめられて。

『富仁親王嵯峨錦』第四(六・一八五)

○かの黒主が歌の心は。薪を負へる山人の。花の木蔭に休むけしきを。残し置きたる筆の跡。『飛雲』(四・二六一六)

●(古今集序) あをやぎのいとたえずまつのはのちりうせずしてまさきのかづらながくつたはりとりのおとひさしく

◎かぎりしられずつきもせぬ松の葉のちりうせず。正木のかづらながき世のめでたきためしさふらふと。

『傾城無間鐘』第一(七・一四三)

○松の葉の。散り失せずして。真柄のかづら長く伝はり。鳥の跡絶えず。
『采女』(一・四〇九)

○松の葉の散り失せず。真柄のかづら。永く伝はり鳥の跡あらんその程は。
『俊成忠度』(三・一四四四)

○松の葉の散り。失せずして真柄のかづら長居は恐れあり
『盛久』(五・三一〇)

●三八 君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる
とものり

○牛若君はる直りて色をも香をもしる人ぞ。しるべ有げな心ざし。
『末廣十二段』第四(三・一七一)

◎馬子もつれず只一騎色をも香をもしる人に。しらすくつわのりん
『鎮西八郎唐土船』第一(五・一六六)

○心の。色も香も知る人ぞ知らずな間はせ給ひそ

『小塩』(五・三四五九)

●一三九 さつきまつ花橘のかをかあげば昔の人の袖のかぞする よみ人しらず

○是は昔みし。花たち花のかをかたち物の給はぬと恨むるが。

『仏法舍利都』第四(二・三五二)

○さつき待。花橘の香をかげは。昔の人と。詠しに我は。梢の秋待て。

『富仁親王嵯峨錦』第四(六・一八九)

○花橘のかをとめし。昔の人の袖ならで。いきてわかれしつまを恋。

『忠臣青砥刀』中之卷(七・二四〇)

○ましてや一樹の宿りとして。風たちばなの香をとめて。花も連なる。枝とかや

『蟬丸』(三・一六八四)

●二三七 をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやどにひとりたてれば

兼覽王

○しのぶのおかのおみなへし。うしろめたしや。いろごのみ

『鎌倉尼將軍』第四(一・二二三)

○なまめき立てる女郎花。うしろめたくや思ふらん。

『女郎花』(五・三四九二)

●三六五 立ちかわれいなばの山の峰におふる松ときかば今かへりこむ 在原行平朝臣

○松はねほれて立別れ。いなばの山のみねにを。またはこん 袖の雪たまれば。こゝにみほとふじ。

『末廣十二段』第三(三・一五三)

○旅行人の立わかれ。いなばの山や。みやぢ山みねの。もみぢの。

『義経新高館』第三(四・三一三)

○思ひの煙立ち別れ。稲葉の山風吹き乱れ。恋路の闇に迷ふとも。

『恋重荷』(二・一一六五)

○あら頼もしの御歌や立ち別れいなばの山の峯に生ふる。まつとし聞かば。今帰りこん。それはいなばの遠山松

『松風』(五・二八三七)

●五二二 ゆく水にかずかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり 読人しらず

○行水に。かずかくよりもはかなきは。此身計か世の人の。さがなき恋のやちまたに

『花山院都巽』第四(三・二七七)

○行く水に数書くよりもはかなきは。思はぬ人を思ひ妻の。跡を慕ひて上り瀬の。

『水無月』(五・二九四〇)

●六四七 むばたまのやみのうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

よみ人しらず

○一すんさきまうば玉のやみのうつゝの夢やぶる。松に残しておもかげのはや二三町へたたれり。

『三井寺開帳』下之卷(一・二八七)

○あたりを見れば鳥羽玉の。闇の現の人もなくいかにせんとか思ひ川

『夕顔』(五・三二一五)

●六七七 みちのくのあさかのぬまの花かつみかつ見る人にこひやわたらむ

よみ知らず

○しんくさへ。あさかの沼の花かつみ冬がれはてゝ軒ばふく。

『坂上田村麿』第四(六・二五〇)

○陸奥の。浅香の沼の花がつみかつ見し人を恋草の。忍ぶもぢぢり誰ゆゑぞ

『花筐』(四・二五九〇)

●八〇七 あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかも世をばうらみじ

典侍藤原直子朝臣

○扱は此世をさりしよなもにすむむしのわれからと。やいばのうへにきへし身の此世に心ほとゝめねど。

『鎌倉三代記』第四(四・二二七)

○海士の刈る。藻に棲む蟲のわれからと。音をこそ泣かめ。世をば恨みじ。

『阿漕』(一・三七)

●八二八 流れては妹背の山のなかにおつるよしの河のよしや世中

読人しらず

○うらめしのわかさやな。いもせの山の中を行吉野の川のよしや世に。何がつらふて悲しうて。

『鎌倉三代記』第四(四・二二六)

○ながれては。いもせの山の。なかを行。ながれの末の今川や。こひのふかみにしづめ共。うはべばかりは。あさかのまへ。
『傾城無間鐘』第三(七・一六八)

○年月の流れては。妹背の山の中に落つる。吉野の川のよしや世と思ひも果てぬ心かな
『弱法師』(五・三三二一八)

●八二九 なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなばかへりくるがに 小野たかむらの朝臣

○おもひて恋てなく涙。雨とふらなんみつせ川。水まさりなは。かへりこんかにあら。なつかしの我つまや。

『仏法舍利都』第四(二・三五〇)

『船橋』(四・二七六三)

○泣く涙。雨と降らなん渡川。水増りなば。帰り来るかに帰れや帰れあだ波の

よみ人しらず

●八六五 うれしきをなにつつまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを
『信田森女占』第四(二・三三四)

○嬉しさを昔は袖につゝみしが。こよひは身にもあまれ共ならばぬ宿のひとりねに。
『富仁親王嵯峨錦』第四(六・一八八)

『富仁親王嵯峨錦』第四(六・一八八)

○此手をにぎる心よさ。何にたとへんから衣唐天ぢくも日本も。取てゆけ成たのしみと。

『傾城無間鐘』第一(七・一四四)

『小督』(二・一一〇九)

○今は帰りに嬉しさを。何に包まん唐衣ゆたかに袖うち合はせ御暇申し。

よみ人しらず

●八七八 わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て間
『甲陽軍鑑合様姿』第四(三・四九)

○わが心慰めかねつ更科や。姨捨山に照る月を見てと。詠ぜし人の跡ならば。
『姨捨』(五・三四七五)

●九三八 わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ
小野小町

○うきしづむ身はうき草の根をたへて。しやばにのこれるりんゑのがうくは
『鎌倉三代記』第四(四・二二六)

○侘ぬれば身をうき。草とうかれにし。それさへ今は。昔にて。小野とはいはじおのづからおしまぬ命ながらへて。

『富仁親王嵯峨錦』第四(六・一八九)

○わびぬれば身を浮草の根を絶えて。誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ。これは小町の歌候な『関寺小町』(三・一六一)

●一〇九四 こよろぎのいそたちならしいそなつむめざしぬらすなおきにおれ浪

『鎮西八郎唐土船』第三(五・一八七)

○水底を穿ち払ふや潮瀬に。こゆるぎの磯菜摘むめざし濡らすな。沖に居れ波
『和布刈』(五・三〇三七)

【後撰和歌集】

●一〇七五 嵯峨の山みゆきたえにしせり河の千世のふるみちあとは有りけり
在原行平朝臣

○廻らば廻れ。此車。千代の古道御幸坂。
『鎮西八郎唐土船』第一(五・一七〇)

○嵯峨の山御幸絶えにし芹川の。御幸絶えにし芹川の。千代の古道跡ふりて。行方正しき
『松尾』(五・二八四二)

【拾遺和歌集】

●一 はるたつといふばかりにや三吉野の山もかすみてけさは見ゆらん
壬生忠岑

○春立ツといふばかりにや松杉の。並木もけしきにこやかに霞初たる檜皮ぶき。
『八幡太郎東初梅』第三(六・三四)

○春立つと。いふばかりにや三吉野の山も霞みて白雪の消えし跡こそ、道となれ 『二人静』(四・二七一三)

●一七〇 あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま(注) つらゆき

○うかるゝ酒の源はすめる時にも逢坂の。関の清水は都路や醒が井野中三の間まで

『坂上田村麿』第四(六・二五五)

○かかる奇特に逢坂の関の清水に影見ゆる。月毛のこの駒を。引き立て見れば不思議やな。 『蟬丸』(一・二二二)

○逢坂の。関の清水に影見えて今や引くらん望月の。駒の歩みも近づくか。 『蟬丸』(三・一六八二)

【金葉和歌集】

●五五〇 おほえやまいくのみちのとほければふみもまだみずあまのはしだて 小式部内侍

○忍ぶ恋。わかるゝ恋の恋心いく野ゝ道が遠ひとて。 『頼光新跡目論』第一(五・一〇九)

○此世の外を。二世かけて。幾のゝ道は遠けれど。通ふ心は程近く。 『頼光新跡目論』第二(五・一一二)

○ここは名を得し大江山。生野の道は猶遠し。天の橋立与謝の海。大山の天狗も。 『大江山』(一・五六三)

○旅の衣の日もいく日生野の道の程遠き。まだ踏みも見ぬ橋立や。 『九世戸』(二・九二二)

【詞花和歌集】

●一七 みやま木のそのこずゑともみえざりしさくらにはなにはあらはれにけり 源頼政

○み山木は其梢ともみへざりし。桜は花にあらはれてけいせいかいとお見出しは

○翁も姥もうちゑみて深山木のその梢とは見へざりし。桜は花に顕て名に奥州の旅衣。『三井寺開帳』上之卷（一・二四二）

○さて今も人に見え候か深山木のその梢とは見えざりし。桜は花に顕はれたる。老木をそれと『実盛』（二・二二五〇）

●三三三 あしかれとおもはぬやまのみねにだにおふなるものを人のなげきは 和泉式部

○あしかれと思はぬ山のみねにだに。あふ成物を人のなげきは君をあなどり。『鎌倉三代記』第四（四・二二八）

○悪しかれと。おもはぬ山の峯にだに。思はぬ山の峯にだに。人のなげきは生ふなるに。『鐵輪』（一・七一一）

【千載和歌集】

●一二二 花はねに鳥はふるすにかへるなり春のとまりをしる人ぞなく 崇徳院御製

○花は根に鳥は。ふるすにかへれ共行て。返らぬ死出の道 『鎌倉三代記』第四（四・二二七）

○花は根に。鳥は古巢に帰れどもわれは二度この道に。帰らん事もかた糸の。 『竹雪』（三・一八八三）

●二五九 夕されば野べのあきかぜ身にしみてうづら鳴くなりふか草のさと 皇太后宮大夫俊成

○深くちぎりて行。末は。うづらなく成ふか草山。ふもとをゆけば水清き。 『末廣十二段』第五（三・一八一）

○野山に続く里はいかにあれこそ夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなる深草山よ 『融』（四・二二二八）

【新古今和歌集】

●二六二 みののべにしみづなるる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ 西行法師
○あやおもしろの風景と。しばしやすらふ道のべの清水流るゝ柳陰。心をすましおはします。

○丑の時をば松かげに暫し。とてこそたゞずみし。 『甲陽軍鑑今様姿』 第四(三・五〇)
『末廣十二段』 第一(三・一三七)

○それは野辺の清水。是は軒の柳陰。しばし迎こそ苔衣。座敷へこそは請じけれ。 『新板兵庫の築島』 第三(四・九九)
○一むら立し松かげに。しばしとてこそ宿り木の 『鎮西八郎唐士船』 第一(五・一七二)

○暫し。とてこそ立とまる。老木の柳力とは頼がたなき侘住居。 『大友皇子玉座靴』 第三(六・三〇一)
○うき世をのぞく一ツまどしばし。とてこそ立よれば。 『東山殿室町合戦』 第三(七・二九)

○道のべに。清水流るる柳蔭。清水流るる柳蔭。暫しとてこそ立ちとまり。涼みとる言の葉の。
『遊行柳』 (五・三一九七)

●六二〇 かささぎのわたせる橋におくしものしろきをみれば夜ぞふけにける 中納言家持
○又家持かゝい歌には。たうふぐしわたせる。橋におく霜の。白きを見ればやしよくなりけり。 『新百人一首』 第二(三・八九)

○されば和歌にも。かさゝぎの。わたせるはしに。おくしものしろきを見ればよの。よこそねられねとよむことは
『殺生石』 第一(四・一二九)

○川波に。渡せる橋に置く霜の。白きを見れば今朝はまだ。渡りし人の跡もなし。 『張良』 (三・二〇四九)

- 七〇七 たかき屋にのぼりてみれば煙たつたみのかまどはにぎはひにけり
『鎌倉尼將軍』第一(一・一八七)
- 築都が原も打つゞき民のかまどは。にぎわひけり。
『難波』(四・二三三三)
- 高き屋に。登りて見れば煙立つ。民の竈は。賑ひにけりと叡慮にかけまくも。
僧正遍昭
- 七五七 すゑのつゆもとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらん^(注)
『義経新高館』第四(四・三二七)
- 草葉における末の露。もとの雫と今ぞしる。
『藍染川』(一・二三六)
- みづからは誰を頼むべき末の露本の雫もよしやよし。
西行法師
- 九八七 としたけて又こゆべしとおもひきや命なりけりさやの中山
『頼光新跡目論』第四(五・一四二)
- さよの中山なか／＼に。なきたまならは古里へ。
『賀茂物狂』(二・七五四)
- 岸边に波を掛川。小夜の中山なかなかに。命のうちは白雲の又越ゆべしと思ひきや
読人しらず
- 九九〇 よそにのみ見てややみなんかづらきやたかまの山の嶺のしら雲
『日本傾城始』第二(五・二三九)
- 我妻ながら余所にのみ。見てややみなんと計に。かこち顔にも闇を出。
『花月』(二・一〇〇九)
- 日頃はよそにのみ。見てや止みなんと眺めしに。葛城や。高間の山。
『小袖曾我』(二・一一三一)
- 高間の山の峯の雲よそにのみ見てや止みなん。同じ子に。同じ柞のもりめのと。
坂上是則
- 九九七 そのらはらやふせ屋におふるははきぎのありとはみえてあはぬきみかな
『愛護若暗箱』第三(二・一五四)
- 多にし定て妻持て。ふせやにおふるは、木々の。其名をいかにせんとてか。
『傾城無間鐘』第四(七・一七八)
- そのらはらやふせやにおふるは、木々の。ありとは見へて逢ぬ君かな。どう有ふの。
聞きしものを『柏崎』(一・六六四)
- よくよく見れば。園原や伏屋に生ふる箒木の。ありとは見えて逢はぬとこそ。

○思ひ出でられて候。園原や伏屋に生ふる帯木の。ありとは見えて逢はぬ君かなと詠めり。『木賊』(四・二二〇九)

●一三七四 なつのゆくをしかのつのつかのまもわすれずおもへいもが心を 人麿

○いづちへかおしかの角のつかのまも。誰をこふやらこはぬやら。『花山院都異』第四(三・二七三)

○緑の髪も生ひのぼる牡鹿の角の。束の間も仙人を。今見る事ぞ不思議なる 『一角仙人』(一・二八〇)

○牡鹿の角の束の間も。牡鹿の角の束の間も。寝られんものか秋風の。『錦木』(四・二三五二)

【続後拾遺和歌集】

●四一五 偽のなき世なりけり神無月たがまことよりしぐれそめけん 前中納言定家

○めぐる月日にいつはりのなきよ。なりけり神な月しもくとある。色里や 『傾城国性爺』第三(三・三三八)

○偽りのなき世なりけり神無月。誰が誠よりしぐれそめけん。この言書に私の家にてと 『定家』(三・二一〇六)

●一〇八三 かひもなき和かの浦わのもしほ草かきおくまでを思ひ出にせん 平貞直

○和歌のうらはのもしほぐさ。玉ものまへとよべかしと 『殺生石』第一(四・一三二)

○和歌の浦わの藻塩草和歌の浦わの藻塩草波よせかけて洗はん 『草子洗小町』(二・一一九四)

○かの大伴の黒主が。心を寄する老の波和歌の浦わの藻塩草かく喩へ置く世語りの 『志賀』(二・一二九六)

まとめ

海音の勅撰集の和歌利用を謡曲というフィルターを通してみた結果は以上の通りである。結果を元に謡曲作品を列挙してみと、『阿漕』、『蘆刈』、『蟻通』、『藍染川』、『采女』、『大江山』、『鐵輪』、『柏崎』、『一角仙人』、『賀茂物狂』、『九世戸』、『花月』、『小督』、『小袖曾我』、『恋重荷』、『実盛』、『草子洗小町』、『志賀』、『俊成忠度』、『関寺小町』、『蟬丸』、『竹雪』、『張良』、『定家』、『木賊』、『融』、『難波』、『錦木』、『花筐』、『飛雲』、『二人静』、『船橋』、『松風』、『松尾』、『水無月』、『和布刈』、『遊行柳』、『夕顔』、『弱法師』、『井筒』、『繪馬』、『小塩』、『姨捨』、『女郎花』の四十四曲となる。その中で、海音が謡曲を利用していることが既に確認されているものを挙げると、『蘆刈』、『采女』、『柏崎』、『一角仙人』、『花月』、『小袖曾我』、『恋重荷』、『実盛』、『草子洗小町』、『関寺小町』、『蟬丸』、『張良』、『定家』、『難波』、『花筐』、『松風』、『遊行柳』、『小塩』、『女郎花』の一九曲に上る。この結果を見ても、やはり勅撰和歌集からの直接利用の可能性の他に、謡曲からの間接利用の可能性も考える必要があると言えるのではなからうか。勿論、勅撰和歌集や謡曲を利用したというよりも、むしろそれら典拠を意識させない程有名なものとなった表現を利用する場合も多い事は十分推測される。

因みに、海音に利用された和歌は近松門左衛門の場合ではどのようであろうか。参考までに『近松語彙』の「附録 典拠目録」を基に、海音の場合と対照させてみたい。当然の事ながら、『近松語彙』に記載される勅撰和歌集の典拠は、謡曲というフィルターを通したものではない。単純に対照させることはできないが、ここでは謡曲との関係から見た

海音の利用した和歌がどの程度近松の利用の中に含まれるのかを明らかにするという目的で提示したいと思う。そこで、海音の利用が多かった『古今集』と『新古今集』の両作品について調査したい。^(注8)

最初に、近松が『古今和歌集』、『新古今和歌集』を利用したものを列挙する。但し、複数回の利用が認められる場合でも表記は同一とする。その際、海音も利用した和歌に付いては、括弧付きで示すこととする。

『古今和歌集』

(古今集序)、一、五、一九、二七、二九、四一、五三、五六、六二、八八、一一三、一一九、一五二、一五三、一六五、一六七、一七二、二二二、二二五、二二六、二二七、二四一、二七三、二七七、二八三、二九一、二九四、三〇三、三四一、三四三、三四八、三六〇、四〇九、四七三、五五四、(六四七)、(六七七)、七〇七、七二四、(八〇七) (八二八)、八六一、八六七、八八九、九〇五、九〇九、九二一、九三三、(九三八)、九六二、九七一、九八二、九八三、九九四、一〇〇七、一〇一一、一〇二二、一〇一六、一〇二〇、一〇六四、一〇八一、一〇九一、一〇九三

『新古今和歌集』

一一四、一一六、一七五、二〇一、(二六二)、二六七、三四〇、三六二、四九一、(六二〇)、六七一、(七〇七)、七〇八、七二〇、(七五七)、九七九、(九八七)、(九九〇)、九九四、九九六、(九九七)、一〇二三、一〇三〇、一〇三四、一〇四九、一一三二、一二六四、一一九一、一三二八、一四三二、一六八九、一九一六、一九六三

海音が『古今集』を利用した用例は、「古今集序」を除けば一四首であるが、そのうち五首が重なっている。また、『新古今集』の場合では、海音の利用した八首の内、七首が重なっていることになる。『新古今集』の場合は割合が非

常に高い。その場合、用例で示した海音の謡曲作品を挙げると、(近松と対応しない一三七四番の和歌利用の場合を除く)『遊行柳』、『張良』、『難波』、『藍染川』、『賀茂物狂』、『花月』(又は『小袖曾我』)、『柏崎』(又は『木賊』)となる。これらの謡曲作品は、『木賊』を除き、近松が和歌以外の部分でも表現利用が確認されている謡曲作品と全一致している。^(注9)『古今集』と『新古今集』での近松と海音の利用の一致の割合が異なるものではあるが、やはり謡曲を通して周知された和歌を利用するという可能性は大きいと言えよう。

注

- 1 「紀海音の謡曲利用一覽」(上)、(中)、(下)(『北海道大学文学部紀要』平成10年12月、同11年8月、同年12月)、『紀海音と謡曲』(『国語と国文学』平成11年11月)参照。
- 2 初演時については『紀海音全集』の記述による。但し、『義太夫年表』の記述にしても、『小野小町都年玉』が『八百屋お七』に先行することが確認される。
- 3 注1参照。
- 4 歌番号、和歌、作者名は『新編国歌大観』による。また、海音に関するものは全て『紀海音全集』による。また、謡曲作品については『謡曲大観』によるものとする。以後の引用もすべてそれに倣う。
- 5 この歌は『伊勢物語』にも記載され、典拠の一つとも考えられる。
- 6 『坂上田村麿』の「逢坂の。関の清水」の表現に関しては、『後拾遺和歌集』「七四一 あふさかのせきのしみづやにごるらむいりにしひとのかげのみえぬは 僧都遍救」とあり、また、『千載集和歌集』「五二三 こえて行くともやなからむあふ坂のせきのし水のかげはなれなば 大納言定房」も一応典拠として考えられる。
- 7 『義経新高館』の「末の露。もとの雫」の表現に関しては、『続千載和歌集』「二〇三五 何事かおもひもおかんすゑの露もとのしづくのかかるうき世に 永福門院内侍」とあり、また、『続拾遺和歌集』「一三四四 すゑの露もとのしづくをひとつぞと思ひはてても

袖はぬれけり」も一応典拠として考えられる。

8 近松の場合も海音と同様に時代物作品に利用されたもの限定し調査する。

9 注1「紀海音と謡曲」参照。